

特別の教科／道徳

自他と対話しながら、新たな自己を創る子



特別の教科 道徳

自他と対話しながら、新たな自己を創る子

遠藤 信幸 川井 優子

平成29年より「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」として新たにスタートしたが、いまだに「指導過程の基本型」「一時間一主題」などの固定概念が根強くある。よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うという大きな目標のもと、「特別の教科 道徳」の授業のあり方をさらに進化させるべきである。その進化において、子供たちが自ら自己の生き方・あり方を今まで以上に見つめ考え、子供自身が自らを変化していこうと意欲を表出することが望まれる。子供たちが授業において多くの他者と関わり合いながら、今の自分自身をこえていき、新たな自己の生き方・あり方を創り出していく道徳の授業を構想する。

1. 道徳科の研究テーマ

(1) 問題意識

内閣府が2013年に実施した「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」における「自分自身に満足している」の項目において、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は日本45.8%、韓国71.5%、アメリカ86.0%、イギリス83.1%、ドイツ80.9%、フランス82.7%、スウェーデン74.4%と日本の割合は最下位であった。また、国立青少年教育振興機構が2017年に実施した「高校生心の健康に関する意識調査—日本・米国・中国・韓国の比較—」における「私は価値のある人間だと思う」の項目において、「そうだ」「まあそうだ」と回答した割合は日本44.9%、アメリカ83.8%、中国80.2%、韓国83.7%であり、この調査においても日本は最下位であった。OECD(経済協力開発機構)が2018年に実施した「人生の意義」に関する意識調査の結果についても日本は他の国よりも数値が低い。この調査は、15歳の生徒を対象に行われたが、生徒が自分の人生に明確な意義や目的を感じているかどうかを尋ねた調査結果は、OECD諸国の平均では65.33%の生徒が「自分の人生に明確な意義や目的がある」と回答していたのに対し、日本の生徒の割合は45.67%と、加盟国の中で最も低い結果となった。これらの結果は日本の子供たちの心における深刻な問題である。

これからの社会を担う子供たちの、社会のあらゆる不安にも負けない心を育成する上で、道徳科の役割は非常に大きい。自分の生き方・あり方を見つめる学習を通して、子供たち一人一人が自分自身を向上させていこうとする意欲をもつことが求められている。そのためには、道徳科の学習が子供たちの道徳性を養うという目標のもとで、より柔軟で能動的な学習へと進化していく必要がある。道徳科の学習で「自分はどんな大人になるのか、なりたいのか」を子供たちに明確にもたせ、子供自らが自己の道徳的心情・道徳的判断力を繰り返し問い返ししながら、道徳性を養うことが求められる。

(2) テーマ設定の理由

本年度の道徳部の研究テーマを『自他と対話しながら、新たな自己を創る子を目指して』とした。「自他と対話しながら」であるが、「自他」とは「自分と他者(友達)」という狭義ではない。石川(1997)は「子供自身が気付くということ、すなわち、自分を知ること、自分との出会いが大切である。そして、自分との出会いをより確かなものにしていくために、自分と教材(道徳資料)との出会い、自分と友達・教師との出会いがある」と述べていることから、「自」については「今までの自分」「今の自分」「これからの自分」、「他」については「友達・教師」「教材」と捉える。「教材」については「教材から生まれる問い」も「出会い」に含まれる。これらの「自分」「友達・教師」「教材」の3つを道徳の授業に出会わせ、それぞれをつなげていく。そして「対話」についてであるが、安斎(2020)は「自分とは異なる意見に対して早急な判断や評価を下さずに、どのような前提からその意味づけがなされているのか、「価値を深

める」ことを重視します。それはすなわち、自分自身の前提を相対化し、理解することにつながります。結果として、お互いに共通する新たな意味を発見し、自分たちにとっての現実を形づくっていくことができます」と述べている。道徳の時間では児童が自分事として道徳価値について考えをめぐらす場合、そこに「考えたくなる、考えなくてはいけない問い」が必要である。その問いの解決に向けた話し合いの過程で他者と「お互いに共通する新たな意味を発見」することができる。よって道徳部では「対話」を「偶発的、突発的に生じる何かとの出会いによって生じる迫りすべき課題の解決に向けて、自他で思いや考えを見つめたり深めたりする中でお互いに共通する新たな意味を発見する活動」と定義する。

「新たな自己を創る子」だが、これからの時代、子供たちが偏見や差別などといった一方的な見方で物事を見るのではなく、一人一人が他者と豊かに関わり合いながらよりよい自分の人生を自分の力で創り出していくことがより一層求められている。「自己を創る」ためには、一人一人が自分事として「問い」を捉え、自分ならどうしていけばよいのかを他者との対話を通して、自分なりの解決策を見つけていくことが求められる。子供たちが自他と対話しながら、価値を創り、「今までの自分」から「これからの自分」を創り出し、「自己の生き方」「自己の未来」まで想像を広げ、「自分のよりよい人生」を想像して歩んでいけるような道徳性の一要素である道徳的実践意欲・態度の育成を道徳部は授業の柱として設定する。

2. 全体研究テーマとの関連

(1) 道徳科の本質の吟味

道徳科の目標は「よりよく生きるための基盤となる道徳性の育成」である。その道徳性を育てる際に、道徳科の授業においてはその授業が子供たちの何を育てたいのか、心情なのか判断力であるのかそれとも態度化なのかを設定していくことが重要である。そのことを念頭に置き、「本質」については以下のように定義する。

① 教科の本質Ⅰ（その教科の個別知識・技能を統合・包括する鍵概念）

道徳科の目標は「よりよく生きるための基盤となる道徳性の育成」であるが、では道徳性とは何か。文科省(2017)は「道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性であり、道徳教育は道徳性を構成する諸様相である道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度を養うことを求めている。」と述べている。それぞれについて「道徳的判断力は、それぞれの場面において善悪を判断する能力」「道徳的心情は、道徳的価値の大切さを感じ取り、善を行うことを喜び、悪を憎む感情」「道徳的実践意欲は、道徳的判断力や道徳的心情を基盤とし道徳的価値を実現しようとする意志の働きであり、道徳的態度は、それらに裏付けられた具体的な道徳的行為への身構え」と述べている。道徳科の授業で育てる本質はまさにこの道徳性である。道徳性の何をどう育てるかは、授業で取り扱う道徳的価値や教材、子供たちの実態によって大きく変わってくる。この道徳性は道徳科においてとても重要であり、道徳科の学習では大事な鍵概念である。

② 教科の本質Ⅱ（その教科ならではの認識・表現の方法）

道徳科における本質Ⅱは「自己を見つめ、自己の生き方・あり方を考える」と定義する。道徳科の学習が他教科と大きく違うところは自己の生き方・あり方について振り返ることを学習の中心課題としていることである。道徳的問題について自分はどう考えるのか、今までどうかかわっていたのか、これからどうしていくのかといった多角的に考えていくことこそが道徳科の学習では重要である。そのため、「自己を見つめ、自己の生き方・あり方を考える」ことを道徳科における特質の学習活動と捉え、本質Ⅱとした。

以上のように教科の本質Ⅰ・Ⅱを児童が意識しながら学習することを道徳科の本質の吟味とする。

(2) 一人一人の子供が本質を味わう学びのプロセスのデザイン

① 「道徳的価値」「教材」「児童」の一体化を図る授業設計

道徳科の授業の三大要素は「道徳的価値」「教材」「児童」である。この三者がつながり、関わり合うことで授業は成立している。この3つの優位性はなく、それぞれはフラットな関係である。例えば、「道徳的価値」について教師が教えたいことが強すぎた場合、「児童」にとっては有意義な学習とはならないだろう。また、「教材」に重きを置かすぎると「児童」の教材について考えたい思いを無視した学習となってしまうだろう。そして、教師が「児童」を知らずに授業において「何を考えさせたいか」が明確にならない授業は「児童」にとって価値が感じられない学習となるだろう。

う。道徳科の学習では三大要素がそれぞれによりよく関わり合うことで教師にとっても児童にとっても学びのある学習が生まれてくる。

道徳部では、この三大要素の中でまずは「内容項目における児童の実態」を把握していくことを学習を構想する際に大切にしていける。子供たちは授業で扱う道徳的価値について「何を知っているのか」「何が分からないのか」「自分はどうか行動してきたのか」などを教師が理解するところから授業を構想していく。「何を考えさせるか」が形になることで「道徳的価値」をどこまで考えさせるか、そのために「教材」をどう展開していくかが明確になってくる。その一連の流れによって、道徳部が目指す「子供と共に創る道徳の授業」を構想することができる。

教師が「道徳的価値」を深く理解することもとても重要である。子供たちの自由な発想を大切にしながらも考えさせたいことから学習が大きくずれないようにするためにも「道徳的価値」を深く理解する必要がある。分析の仕方としては、小学校学習指導要領の内容項目の基に、文献や実践論文からさらなる解釈を付け加えていく。

② 「自己の生き方・あり方」を定義し直す学習構想

道徳科の学習で重要なことは、「自己の生き方・あり方」を子供自身が進んで振り返ることである。教材の課題から登場人物の心情理解や、教材のテーマについての話し合いで授業が終わってしまうのでは道徳科の学習では不十分である。道徳的価値について教材を基に話し合いながら「自分はどうかだったのか、これからどうしたいのか」といった自己の生き方・あり方を見直し、構想していくことがこれからの道徳科の学習ではより求められる。

道徳科の学習の大前提は「その一時間に子供たちの変容を望まない」ことである。十人いれば十通りの学びを保証していくことが求められている。そうした考え方を前提とした上で「自分はどうか生きていくのか、どうしていくか」と自分で自分の生き方をデザインしていく視点を大切にする。具体的な手立てとしては「道徳科の学習の単元構想」や「ワークシートによる振り返り」などが考えられる。また道徳科の授業において、「振り返り」の活動は「終末」に行われることが一般的であるが、本研究では導入においても設定していく。また、展開においては「自分なら」と投影的な発問を意図的に行うことで道徳的問題において自分はどうか向き合うのかを考えさせることで、自己の生き方を考えさせるきっかけとする。

3. 研究の重点

(1) 道徳的価値を子供に自覚させる学習環境デザイン

道徳科の授業において重要なことは、授業の展開が教師の思いや教えたいことで進むのではなく、子供たちに何を考えさせるかを子供の視点に立って考えることである。そのためには「子供たちが何を知っているのか(価値理解)」「教師は子供たちの何を知っているのか(価値観理解)」「教師は価値について何を知っているか(自己価値理解)」の3つの理解を教師が学習環境をデザインする上で深めることである。この3つは学習環境デザインの根幹である。

道徳科の授業において子供たちは道徳的価値について「何を理解をしているのか」を子供たちに見つめさせることが重要である。それは学習を学ぶめあてに関わる。そして、教師も「考えさせる道徳的価値について何を知っているのか」を見つめ、子供と教師の思考を重ねる必要がある。そこから、教師の意図を反映した子供が主体となる授業が生まれてくる。教師と子供の道徳的価値の理解が一致した時に、学習での「学習のめあて」や「学習の問い」が生まれてくる。「この一時間は何を学習し、自分の生き方にどうかかわるのか」を意識させることができる学習を構想する。

(2) 「自己の生き方・あり方」を創り出す学習指導計画の構想

道徳科の学習は「一時間一主題」で設定されることが一般的である。それは教科書の教材数の数と年間授業時数との関連が主な理由である。しかし、子供たちの学習はいろいろな学習とつながって成立している。そのため、道徳科の学習も「一時間一主題」とすでに設定するのではなく、他教科・領域との関連や複数時間扱いの道徳授業など単元構想的な道徳学習を構想する。道徳科と他教科との関連において、文科省は道徳教育という視点で、「道徳教育は、学校や児童の実態などを踏まえ設定した目標を達成するために、道徳科はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて行うことを基本として、あらゆる教育活動を通じて、適切に行われなくてはならない。その中で、道徳科は、各活動における道徳教育の要として、それらを補ったり、深めたり、相互の関連を考えて発展させたり統合させたりする役割を果たす。」と述べており、その可能性を保証している。

自己の生き方・あり方を深く見つめる学びのプロセスをデザインする

—第1学年「二わのことり」の実践を通して—

川井 優子

1. 課題意識

本実践は小学校学習指導要領解説（2017）「特別の教科 道徳編」に明記されている内容項目「友情、信頼」についての学習である。「友情、信頼」の内容項目については本実践が第一回目の授業となる。児童にとって、友達関係は最も重要な人間関係の一つであり、友達関係の状況によって学校生活が充実するか否かが方向づけられることも少なくない。よりよい友達関係を築くには、互いを認め合い、学習活動や生活の様々な場面を通して理解し合い、協力し、助け合い、信頼感や友情を育てていくことができるように指導することが大切である。また、異性についても互いに理解し合いながら人間関係を築いていくことが必要である。そこで、本実践では、主人公の「みそさざい」の行動と心情を通して、友達とは何かを考えさせ、友達とより良い人間関係を築いていこうとする心情を育てたい。

本学級の児童は、男女ともに明るく活発な児童が多い。休み時間は鬼ごっこなどをして元気に遊んでおり、友達との関わりについても積極的な様子が見られる。その中で、学校のルールを守ること、友達との接し方や距離感に課題があることが多く、日常的に指導を行っている。また、道徳科の授業においては、意欲的に挙手して発言する様子が見られる。教材を通して、「自分だったらどうするか？」が深められるように教材や発問を工夫していく必要がある。自分以外の視点に気付き、児童の考えの幅を広げられるようにしていきたい。

本実践で扱う教材は「二わのことり」である。きれいでごちそうもあるうぐいすの家では音楽会の練習が、山奥で寂しいところにあるやまがらの家では、やまがらの誕生日会が開かれることになった。どちらに行こうかと迷うみそさざいの気持ちには、児童も共感することができる。みそさざいが友達の気持ちを考えて行動するよさや友達の存在のよさについて気付き、友達を大切にすることはどういうことかを考えさせたい。

2. 研究テーマとの関連

(1) 道徳科の本質に迫る学習デザイン

本時では、「道徳的諸価値の意義及びその大切さなどを理解すること」に焦点をあてた学習を構想する。そして、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目指す。本実践では教材を通して、道徳的な問題に向き合い、多面的・多角的に思考できるようにする。

授業の中で多様な考え方や感じ方に触れることで、自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己に気付くことができるようにする。そして、学習を通して考えたことや新たに分かったことをワークシートなどに書き、自己の生き方を考えることができるようにする。

(2) 一人一人の子供が本質を味わう学びのプロセスのデザイン

① 道徳的価値についての児童理解

本実践では、価値をどのように理解しているのか事前にアンケートを取り、本時の主題に関わる問題意識をもたせる導入を行う。

② 「自己の生き方・あり方」を定義し直す学習環境デザイン

道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止める。本実践では、児童同士で役割演技を行う。自分の考えを伸び伸びと表現できる雰囲気大切に、考えを交流し合うことができるようにする。

3. 実践の実際

(1) 本時のねらい

やまがらの誕生祝いに行くか、うぐいすの家の音楽会の練習に行くかで迷うみそさざいの姿などを通して、友達のためにできることについて考えさせ、友達と仲良くし、助け合おうとする心情を育てる。

(2) 主題名『ともだちのことを考えて』（B 友情、信頼）

教材名 「二わのことり」（「道徳1 きみがいちばんひかるとき」光村図書）

(3) 実践について

	主な学習活動（・予想される児童の考え）	○留意点 ☆研究テーマとの関連 ※評価
導入	<p>1 問いを設定する。</p> <p>○友達がいてよかったと思うのは、どんな時ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一緒に遊んでいる時 ・休み時間 ・一緒に帰れてうれしい ・友達が助けてくれた時 ・分からない 	<p>○事前アンケートをモニターに提示し、テーマについての導入を図る。</p> <p>○心の内面に关わる発言が出た時は、クラスで共有する。</p> <p>○発問を通して、児童がめあてに向かって自然に考えられるようにする。</p> <p>※問いについての心構えをもったか。</p>
<p>友達を大切にすることはどういうことだろうか。</p>		
展開	<p>2 教材「二わのことり」を読んで考える。</p> <p>○みそさざいが、やまがらの家とうぐいすの家のどちらの家に行こうか迷っているのはなぜだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やまがらのうちは、山奥の寂しいところにあるから ・うぐいすの家の方がきれいだから ・まわりの鳥も行っていったから ・自分だけやまがらの家に行くことはできない ・2羽とも友達だから <p>○みそさざいは、なぜやまがらの家へ行ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誕生日に1人だとかわいそうだから <p>自分も誕生日に1人だったら、寂しい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やまがらさんが喜ぶことをしてあげたい ・誰も来なかったら、悲しい気持ちになるから ・誕生日のお祝いをしてあげたい 	<p>☆教材を読んだ後に「どんなお話だった？」と児童にたずね、問いを引き出す。</p> <p>○1つ目の発問は、誕生日なのに、1羽で過ごしているやまがらの気持ちを想像させる。</p> <p>○2つ目の発問は、本時で中心的な発問であるため、児童一人一人がこの問いについての考えをもつことができるようにする。必要に応じて班で話し合いをする。</p> <p>☆みそさざいが「やまがら」の家に着いた時の会話を考えて隣同士で役割演技を行う。意見を出し合えるようにする。</p> <p>※友達に対して、自分はどんなことができるかを考えることができたか。</p>

終末	<p>3 友達を大切にすることはどういうことか考える。</p> <p>○今日の学習から、自分の生活を振り返り、これからの生活について考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達が嫌がることをしない ・友達が困っている時は助ける ・友達と仲良くする ・けんかしない ・約束を守る 	<p>○ワークシートに自分の考えを書く。場合によっては、タブレットに自分の考えを入力する。</p> <p>☆これから、友達を大切にしようとする発言や、それによって生まれる喜びについての発言を引き出す。</p> <p>※友達と仲良くし、助け合うことのよさについて、考えることができたか。</p>
----	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<導入>

事前に「友達がいてよかったと思うこと」について子供たちにアンケートをとり、導入で児童に提示した。「一緒に遊べる」が13名で圧倒的に多く、「友達がいると楽しい」11名、「話し相手」4名、「一緒に授業ができる」3名、「一緒に登下校できる」3名、「相談に乗ってくれる」2名、「1人じゃない」2名、「友達がいないと寂しい」2名、「一緒に高め合える」1名、「励ましてくれる」1名、「手伝ってくれる」1名、「分かりません」1名などの意見があった。子供たちはアンケート結果に興味津々で、友達の意見にも共感している様子が見られた。「分かりません」に対して、否定的な反応も見られたが、現段階で「分からない」と正直に言えることが大切であることを伝えた。その中で、具体的なエピソードや心の内面に触れている内容をいくつか紹介し、児童がそのことについて詳しく話した。

その後、教材の範読を行った。教材の範読後、気付いたことや感じたことについて児童にたずねた。児童からは「小鳥について」「3羽の気持ちについて」「小鳥の気持ちを伝えあっていることを考える」「大切な日について」「みんな1つの所に行く」などの意見が上がった。本時では、児童の意見から学習のめあてを考えることに挑戦したが、実際には、「友情、信頼」の内容項目について深めるためのねらいを設定することが十分にできなかった。

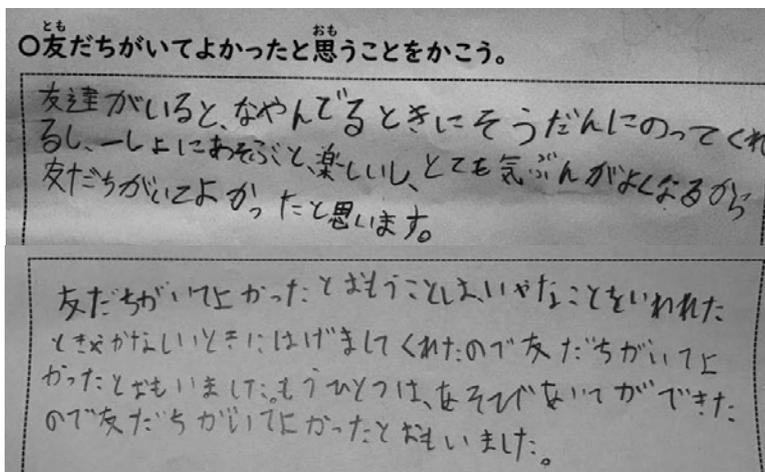


写真1 児童のワークシート



写真2 授業の様子

<展開>

まずは「みそさざいが、やまがらの家とうぐいすの家のどちらの家に行こうか迷っているのはなぜだろうか」の問いについて考えた。児童は「どっちも大切」と答え、それは「音楽会」と「誕生日」の違いについて、「どっちも友達だから」といった両方の意味があった。「行かなかったら損をする」「時間を調整して参加する」「やまがらがかわいそう」「うぐいすの家は明るい、梅の花が咲く場所にある」など様々な意見が飛び交った。

2つ目の「みそさざいはなぜやまがらの家に行ったのでしょうか」の問いには、「来てと言ったのに、誕生日会に来なかったら不安になる」「やまがらが1人ぼっちだから」「誕生日のケーキを1人で食べることになる」「1人だと寒いし、怖い思いをするかもしれない」「いつも1人だったら別に怖い思いはしないんじゃない」など積極的に発言していた。そこで、教材の挿絵を提示し、児童にやまがらの涙の意味をたずねた。「嬉しい」「感動の涙」などの答えがあっ

たため、みそさざいとやまがらはどんな会話をしているか想像し、隣同士で役割演技をするよう伝えた。

役割演技の場面では、中心的な発問で出た意見を基にして、みそさざいが友達を思って行動したことをお互いに伝えさせることをねらいとした。実際には教師の説明不足もあり、児童同士の話し合いが十分ではなかったが、3組のペアが「家に来てくれてありがとう」「一緒にケーキを食べよう」「おいしいね」など、自分達で考えたみそさざいとやまがらの会話を発表し、登場人物の気持ちを考えることができた。

<終末>

「友達を大切にすること」道徳の授業で分かったこと、気付いたこと、これから〇〇しようと思うことをワークシートに記入した。授業のねらいや展開の部分で、「友情、信頼」についての押さえが弱かったため、教師がワークシートに提示した「友達を大切にすること」と結びつかなかった児童もいて、何を書けば良いのか分からないといった様子も見られた。その中で、「これからはいたづらをしない」「暴力をしない」「友達が思うことを考える」「みんなと絶対けんかはしないこと」「同じ時間に予定がある時は前の日に確認して、時間を変えてもらうかどっちが大切かを考えた方に行く」「友達って大事なんだなあと思った」「これからは1年に1回しかないと優先順位にして、明日にのぼせることは明日にする」「これから友達の気持ちを考えて、断れることを断って、人が傷つかないようにしたい。声かけの仕方も気を付けて言いたい」「相手の心を考える」などの意見があった。「友情、信頼」に直接結びつく言葉を書く児童ではなかったが、自分なりの言葉でこれから〇〇しようと思うことを表現しているのでも、自己の生き方・あり方を見つめる学びにつながったと考える。さらに、低学年を指導するにあたって、ワークシートに書く視点を明確にすることや、選択肢を提示することも必要であると考えた。学級全体で意見を共有するのは、後日の道徳の時間となった。

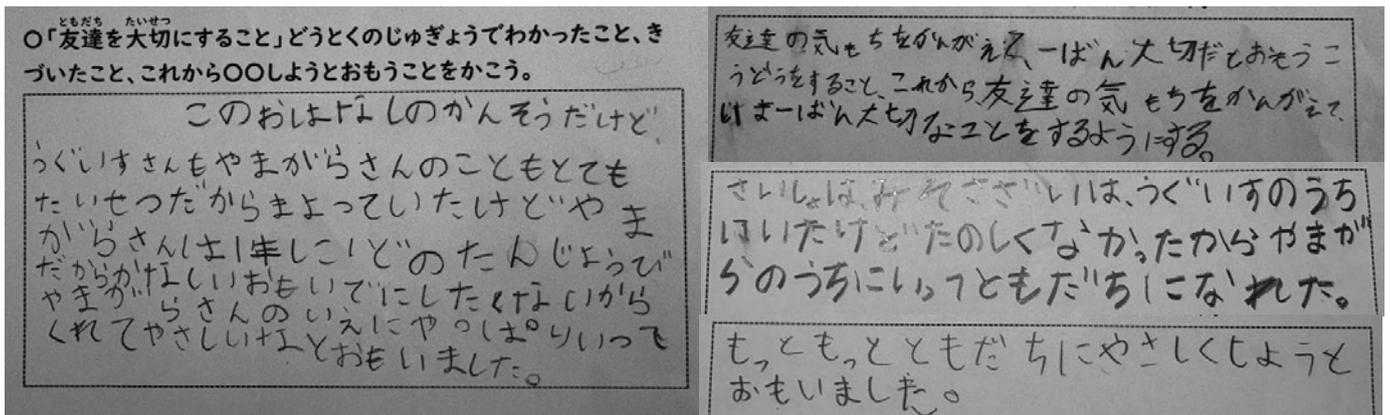


写真3 児童のワークシート

4. まとめ

導入では、アンケートに書いた自分の意見や友達の意見を聞いて、自己を見つめることができていた。そこから、どう教材につなげるかが重要なポイントだった。また、子供ができるだけ登場人物などに自己を関わらせ、自分の問題として考えることができるように、役割演技を表現活動として取り入れたが、授業の終盤であり、集中力が途切れがちな時間であることや、話の本質からずれてしまうことを防ぐ手立てが必要であった。それには、動画などを提示して、事前にやり方を伝えることや、登場人物への共感を深めるために、吹き出しシートなどに書く活動を取り入れることも有効であったと思う。そして、「二わのことり」のお話を追うことではなくて、そこから自分の生活や経験に基づいた発言をどう掘り下げていくかを考える必要があった。その内容に関しては、学級経営上の課題や児童の実態を考えて、適宜教師が介入しながら学級で児童の体験を共有することも必要であった。授業全体を通じて、児童は積極的に挙手し、自分の考えを伝えようとしたり、他者の意見を聞こうとする場面が多くみられたので、児童が自ら話したい、考えたい、友達の意見を聞きたいと思える授業作りをするために、低学年の実態を踏まえながら検討を重ねていきたい。

自己の生き方・あり方を深く見つめる学びのプロセスの構想

－第5学年「ブランコ乗りとピエロ」の実践を通して－

遠藤 信幸

1. 課題意識

道徳科の目標は「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」と小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編(2017)には記載されている。道徳部は研究テーマとの関連において、「自分の生き方・あり方」を子供たちはいかに見つめることができるかに重点を置いた。そのため、「よりよく生きるための基盤となる道徳性」の中でも「自分の生き方・あり方」との関連が深い「実践意欲・態度」をどの程度一時間で育てることができるかを本研究では重要視していく。

「相互理解、寛容」の内容項目については本実践が第一回目の授業となる。クラス替えをした5年生であり、一緒に生活するのも一年を経とうとしているが、子供たちは普段の生活や宿泊行事等を経験する中で、相手を理解することは大切であることを理解している。本実践は「相互理解、寛容」の第一回目の授業ではあるが、ねらいを「実践意欲態度」まで高めて設定する。そして、本実践は「公正、公平、社会正義」の学習と「相互理解、寛容」の学習を「統合」する意味合いで授業を行っていく。

本実践ではプロセス創りでの大切な要因である「問い」についての子どもたちの実態を述べる。子どもたちの「知りたい、分かってほしい」という意欲は高い。普段の授業では子どもたちの「知りたい、分かってほしい」という意欲を引き出すような授業の展開を心掛けている。しかし、分かっていることや知っていること、一方的な教え込みなどの授業では授業に向かう意欲は低い。そのため、「問い」については、教師の掲示の工夫によって子どもたちの授業に対する意欲も変わってくる。大きな「問い」については子どもたちの興味関心を引くように設定していく。その問いの解決方法については、子どもたち一人一人がプロセスを設定できるように手立てを講じていく。

本実践の内容項目は「相互理解、寛容」である。小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編(2017)には「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること」とある。人の考えは多様であり、それが豊かな社会を作る原動力ともなる。そのためには、多様さを相互に認め合い、理解し合いながら高め合う関係を築くことが大切である。人はややすると、自己本位に陥りやすい弱さをもっている。相手の意見を聞かなかつたり、相手の過ちを許せなかつたりする。広い心で自分と異なる意見や立場を尊重することで、違いを生かしたよりよいものが生まれるといったよさや、相手の過ちなどに対しても、自分にも同様のことがあることとして謙虚な心、広い心で受け止め、適切に対処できるように指導することが大切である。子どもたちにどうして謙虚な心、寛大な心は他者との生活を送る上で大切なのかを理解させることを通して、今までの自分、これからの自分について考えながら、それらの心を身に付けていくという実践意欲を育てたい。

本実践で扱う教材は「ブランコ乗りとピエロ」である。ブランコ乗りのサムとピエロが、お互いに自分だけがスターだという気持ちを捨て去り、団員たちと団結するお話である。ブランコ乗りのサムとピエロの2人の立場や思いを考えることを通して、分かり合い、認め合うためには何が大切なのかを理解させたい。

2. 研究テーマとの関連

(1) 道徳科の本質に迫る学習デザイン

①本主題における教科の本質Ⅰ（その教科の個別知識・技能を統合・包括する鍵概念）

「相互理解、寛容」の内容項目については、小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編(2017年)に記載されているように高学年は「広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること」が求められる。この文章を基に本授業では道徳性の「道徳的実践意欲態度」を子供が味わうことを目標とする。

②本主題における教科の本質Ⅱ（その教科ならではの認識・表現の方法）

「相互理解、寛容」の内容項目の学習の中で、子供たちが「自己の生き方・あり方」を見つめ、「こうありたい」という態度を目指す意欲を感じさせたい。そのためには、導入と展開において「自分の生き方・あり方」を見つめる時間を設定する。

(2)一人一人の子供が本質を味わう学びのプロセスのデザイン

①自己の生き方・あり方を見つめる学習環境デザイン

本授業では内容項目について「自分はどう考えていたのか」「どう考えが変わったのか」を視覚的に捉えることができるワークシートを設計する。また意識調査を実施し、授業前に自分の生き方・あり方を見つめさせる。意識調査は「相互理解、寛容」の内容項目に関わる内容として「認めたくない、認められないという人を認められる、認めるようになるには?」という文言とする。そして、その意識調査へ回答した内容を踏まえ、一人一人に学習の「今回のめあて」を書かせる。意識調査で書いたことを達成するために一人一人にめあてを持たせることで、より「自己の生き方・あり方」を見つめることができる。

②道徳科の諸要素でつなげる複数時間扱いの授業

「相互理解、寛容」の内容項目について子供が多面的に考え、「生き方・あり方」を多角的に選択することができるように、2時間扱いの道徳授業とする。授業設計としては「内容項目」「意識調査の内容」「教材」は2時間をつなぐメディアとして設定する。

時間	学習活動	味わわせる教科の本質
1時間目	①意識調査「認めたくない、認められないという人を認められる、認めるようになるには?」について考える。 ②教材「ブランコ乗りとピエロ」をよんで2時間を貫く「めあて」を考える。 ③教材「ブランコ乗りとピエロ」について話し合いたいことを考える。	本質Ⅰ:「相互理解、寛容」について振り返る。道徳的心情。 本質Ⅱ:生き方・あり方について想起する。
2時間目	①意識調査を伝え、課題意識をもたせる。 ②教材「ブランコ乗りとピエロ」について「話し合いたいこと」を基に、自分のめあてについて考える。 ③自分の生き方・あり方を考える。	本質Ⅰ:「相互理解、寛容」を実践していこうとする態度。 本質Ⅱ:生き方・あり方を見つめ、「相互理解、寛容」でありたいという思いが高まる。

3. 実践の実際

(1)本時のねらい

対立するピエロとサムの2人が互いを許し認め合い、サーカスを成功させる姿を通して、考えの違う者同士が関わって暮らすためにはどんな心や行動が必要であるかを考え、それらが今の自分にあるかどうかを見つめ、広い心で相手の思いや立場を尊重しようとする態度を育てる。

(2)主題名「分かり合うために」(B 相互理解、寛容)

教材名 「ブランコ乗りとピエロ」(「道徳5 きみがいちばんひかるとき」光村図書)

(3)実践について

<1時間目>

授業の始めに本実践は「相互理解・寛容」の学習であることを子供たちに伝えた。その中で、「似たような学習をしている」ことを伝えると数人から「ハンセン病かな」と反応があった。その反応を聞き、他の子も思い出していた。

「公正、公平、社会正義や差別の学習は相互理解の学習と似ている点がある」ことを子供たちに伝え本題に入った。「相互理解・寛容」に関する子供たちの考えを捉えるためにまず意識調査を行った。「認められない、認めたくない人を認められるようになるには」と書いたワークシートを配布し、書かせた。ワークシートは2時間目の学習についての問いが書けるスペースを用意した。子供たちが書き終わってから、教材の範読に入った。教材の範読後、気付いたことや感じたことを近くの子と共有した後、「この学習での自分のめあて」を書かせた。その後、このお話で話し合いたいことを書かせた。子供たちは意欲的に取り組んでいた。

<2 時間目>

2 時間目は子供たちが内容項目や教材についての関心が薄れないように1 時間目の次の日に行った。

導入では、1 時間目の意識調査の結果を発表した。発表した内容は内容項目に関する「認められない、認めたくない人を認められるようになるには」と「教材で話し合いたい」の2 点とした。子供たちの自由記述で得られた回答をそれぞれテキストデータ化し、分析ソフト KHcoder(Version 3.Beta.07)を用いて、テキストマイニングによる分析を行った。「認められない、認めたくない人を認められるようになるには」では、「相手」「認める」「自分」「人」の4 つ

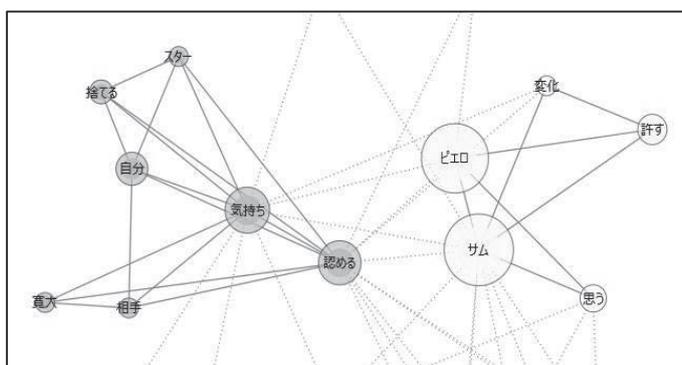


図1 意識調査の共起ネットワーク

の単語のつながりに注目させ、「認められる」にはこの4 つの単語が大事であることを確認した。「教材で話し合いたいこと」については、「ピエロ」「サム」「変化」「思う」「許す」の5 つの単語のつながりに注目させた。図1にあるように「ピエロ」と「サム」についての円が大きかったため、「ピエロ」と「サム」のことについて話し合いたいと考えている子供が多いことを全体で確認した。また子供たちは「スター」「捨てる」という言葉にも興味を示していた。

展開では、まず教材について話し合いたいことを5 つ提示した。5 つは「どうしてピエロは許したのか」「サムはどうして受け入れたのか」「サーカス団は何を認めたのか」「スター、リーダーを捨てる先に何かがあるのか」「スター、リーダーを捨てる良さ、悪さは?」である。この5 つは子供たちのワークシートとテキストマイニングの結果から考察して設定した。図1の共起ネットワークを提示しながらそれぞれの言葉のつながりを確認し、5 つの問いについて紹介した。話し合う前にネームプレートを用い、誰が何を話したいかを可視化した。子供たちの文章では「どうしてピエロはサムを受け入れたのか」と書いている子が多かったため、話し合いもその問いに対して人数が多くなると予想していたが、実際は「スター、リーダーを捨てる良さ、悪さは?」に多く子供が多く集まった。

それぞれの問いについて話し合う前に、ピエロとサムの人物像を正しく理解させるために「仲良くなる前のピエロとサムはどんな人物か」と発問した。「どっちも自分こそがこのサーカス団のスター」「競争心が2 人にある」「目立ちたい」と2 人の共通点を発言する子が多かった。ピエロのリーダー性やサムの努力家であることなどに気付かせたいと考え、「ピエロとサム、それぞれはどんな人?」と問い返した。ピエロについては「リーダー的な存在」「仲間を大切にしている」、サムは「サーカスを盛り上げたい」「自分が目立ちたい」などの意見が出た。ピエロの人物像としてはリーダーとしての立場を理解することができた。その後、5 つの視点ごとで話し合いを行った。自分たちの立ち位置を互いに確認させるため、まずネームプレートを話し合いたい場所に貼らせた。その後、話し合いがより活発になるように3 人から4 人のグループ編成を行った。グループでの話し合いは約5 分と設定したが、子供たちは活発に互いの意見を伝え合っていた。話し合いから感じたこと、考えたことを発表させる前に「教材だけでなく、自分たちの生き方・あり方を見つめるためには何を話すか、話し合いは自分が決めためあての達成のために行うよ」と伝え、学習に向かう心構えをもたせた。まず、グループの人数が少なかった「4、スター、リーダーを捨てる先には何かがあるの

か」から発言させた。子供たちからは「同じ立場になる」「自分だけを捨てることができる」「仲間意識が生まれる」といった意見が出た。そして、「みんなスターになる」という意見に対して「そういうけど、他の人の立場が下に行くんじゃないかな」という意見も出された。その後、4つの問いについては一つずつ聞くのではなく、自由に意見を述べさせた。これは違う意見を言う中で、互いに対して考えてもいない意見や問いが偶発的に生まれることをねらっている。1つ目の「どうしてピエロは許したのか」については「サムsの疲れが分かった」「サーカス団を盛り上げたい気持ちが伝わった」などの意見が出された3つ目の「サーカス団は何を認めたのか」については「サムsの気持ちとピエロの気持ちを合わせてみんなでサーカス団を盛り上げる」と発言が出た。この3つの問いについては、「サーカス団を盛り上げたいサムsの気持ちを理解する」という考えが共通していた。5つ目の「スター、リーダーを捨てる良さ、悪さは？」にネームプレートを貼る子が多く、授業においても発言が多くあった。「みんな同じになる」「争いがなくなること、その人を超えようという気持ちがなくなっていく」「リーダーが絶対だと言いづらい」「平等だとみんなで協力し合う気持ちが生まれる」といった発言があった。ここでの発言は「リーダーの存在意義」についての話し合いになっていったがあえて止めずに話し合わせた。2つ目の「サムsはどうして受け入れたのか」については、発言がなかったため、最後に問うた。「お互いに自分だけがスターという気持ちがよくないと分かったから」という発言が出た。「そして、ピエロ・サム・サーカス団についての理解が深まったと判断し、「みんながサムsだったら受け入れる」と自分の生き方に関する問いかけを行った。子供たちの考えを把握するため、挙手をさせたが「受け入れる」が少なかった。学習のテーマについて話し合う前に板書から「気になったこと、話し合いたいことは？」と切り返したが、教師が望んだ「リーダーの意義」に関する発言はな

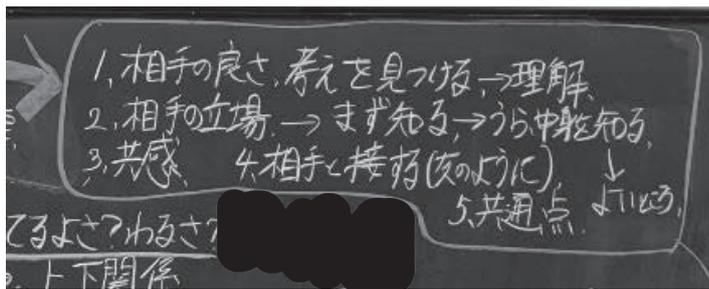


写真2 板書「学習のめあて」について

かった。その後、「認められない、認めたくない人を認められるようになるには」についてプリントに書かせ、発表させた。発表の内容については写真2の通りである。「相手のことを理解する」という意味の言葉が多く出された。そして、学習のまとめとして「自分のめあてはどうなったか」「認められるようになるには何が大切で、自分ができるかできないか」を書かせた。

4. まとめ

「相互理解、寛容」についての理解を深める中で、「相手の立場に立つ」「相手を理解する」といったことを自分からしていこうという態度化に関わる子供たちの発言が見られたことによって、子供たちは教科の本質Ⅰを味わうことができたと考える。教科の本質Ⅱとして「生き方・あり方」をどこまで求め、どのような姿であると定義していくかは課題が残った。授業中の発言や授業後の子供たちのワークシートから子供たちが「生き方・あり方」について深く見つめることができたといえるのかどうか検討していく必要がある。研究の視点として子供の成長を見とる質的研究の視点が必要である。そもそも一時間で「生き方・あり方」まで求めていくことがよいのか、今後検討が必要である。

【参考文献・資料】

- ・樋口耕一.(2004).「テキスト型データの計量的分析 —2つのアプローチの峻別と統合—」.『理論と方法』(数理社会学会) 19(1): 101-115
- ・分析ソフト KHCoder(Version 3.Beta.07) .<https://khcoder.net/>